

「賀陽院水閣歌合」覚書

——漢文日記をめぐって——

北 山 円 正

一

長元八（一〇三五）年五月十六日、関白左大臣藤原頼通の邸第賀陽院（高陽院^①）において、法華三十講の法楽として、十題十番の歌合が催された。「賀陽院水閣歌合」である。すでに頼通の父道長は、長保五（一〇〇三）年五月十五日に、京極殿において法華三十講の法楽として歌合（「左大臣家歌合」）を開催しており、このたびはこれに倣うものであった。当日は、池水を漕ぎわたって左方が登場する派手な演出や雅楽の演奏など、仙界かと見紛うばかりの宴遊が繰り広げられている。この中での歌合は、晴儀と呼ぶにふさわしい。開催前後の出来事を含む一連の経緯は、

歌合に付せられた漢文と仮名の日記——漢文日記は藤原資業^②が書いており、仮名日記は赤染衛門によるかという——が記録しており、全体像を把握することができる。

この歌合には、次の注釈書がある。

『歌合集』（日本古典文学大系・岩波書店・一九六五年三月、萩谷朴校注Ⅱ古典大系）

『歌合集』（日本古典全書・朝日新聞社・一九六九年十二月、峯岸義秋校註Ⅱ全書）

『王朝歌合集』（和歌文学大系・明治書院・二〇一八年十月、田島智子校注Ⅱ和歌大系）

三注釈書は、読解に便宜を与えらるゝとともに、この歌合の和歌史上の位置や当時の華やかな文化を知る上で、はたした役割は大きいと評してよい。ただ、歌合の両日記には、さ

らなる読解・検討を必要とする箇所がある。そこで本稿では、漢文日記から、任意の箇所を取り上げて、主要な用例を引きながら読み解きたいと思う。なお取り上げる箇所は記事の順によらないことをお断りする。またその箇所のページ数を和歌文学大系によって示した。

二

まず本文についてひと言。五月二十一日、左方が、勝利を祈願していた石清水・住吉の神への報謝のために淀川を下る。その途次、「江口」のあたりで、漕ぎ寄せてくる「遊女舟数隻」を「任波容興」と描写している(82)。この後句を、三書は、「波に任せて興を容る」と読む。和歌大系には、「波のまにまに戯れかけてくる」と口語訳がある。遊女らの舟が漕ぎ寄せてくるのであるから、そのように解しうるのであるが、「容興」からこの解釈が導けるであろうか。そもそもこの語を見ることがない。この語は陽明叢書『平安歌合集下』所収本文によれば「容興」であり、『平安朝歌合大成』も同様。しかしここは「容興(与)」の誤写と見るべきである。ゆるやかに動くさまを表す語であ

り、

舞袖飄飄。容与。忽疑身是夢中遊。〔白氏文集〕卷五十八・2878、「府中夜賞」

王船ヨリホヒテ纘兮、未レ出、春棹容与。沙涯之間、孫帷垂兮猶眠、

曉夢芬芳書帙之下。〔新撰朗詠集〕卷上・103・花、紀

齊名「入レ夜花如レ雪」

は、進む舟について用いた例。遊女の舟が、波に揺られてゆつたりと進むのである。

なお記事は、「光粉妖冶、歌曲幽咽」(82)とつづく。あだっぽい遊女の歌声は、「幽咽」であつたとある。この語は、有名な白居易の「琵琶引(行)」(『白氏文集』卷十二・863)の「間関鶯語花底滑、幽咽泉流水下難」ナヤムにもとづくであろう。この二句は、江州司馬に左遷された白居易が、長江の船上で、かつて都でもてはやされた妓女が奏でる琵琶の音を、氷の下で行きなやむ流れのようだと評するくだりである。当該の記事は川を進む舟中でのことであり、そこで遊女らの「歌曲」を聴いている。状況は「琵琶行」と類似する。遊女の咽ぶような「歌曲」は、「琵琶行」の妓女のそれと似ていたようである——落魄して江州へ流れてきた悲哀が、曲調に反映している——。なお記

者はここで、「幽咽」という点で共通するものの、遊女の「光粉妖冶」容貌のあやしい美しさと、華やかさを失った「琵琶行」の妓女との相違に、感興をおぼえたのであろうか。

解釈の問題を、一二取り上げておこう。二十二日に住吉社への報賽を終え、歌会を催し披露がすんで、暁を迎える。左方一行は、当地の海や松並を眺めて感興を催し、ある者は「残月」にむかつて「懷を述べ」、ある者は「鞭・浮雲」以乗興」と記す(88)。この「浮雲に鞭つて」について、和歌大系は、「浮雲の方へ馬を走らせる」と訳し、「謝安辞功 鞭孤雲而養志」(和漢朗詠集・述懷・大江朝綱)を引いている——古典大系・全書は注をつけていない——。これは、藤原忠平が摂政の辞職を願ひ出た「為貞信公」辞撰政第三表(『本朝文粹』卷四・102)からの摘句であり、晉の謝安が官を辞して山林に身を潜め、心を養つたように、私も退隱したいと述べるところである。「孤雲」は世俗を離れた地を象徴する語。『朗詠集』は、世俗を離れようと、「孤雲」に向かつて馬にむち打つの意であり、日記の「感を催し」て「浮雲に鞭」つことは関連がない。なお『朗詠集』諸本の多くは、「鞭」を「伏」に作ってお

り、こちらの方が分かりやすい。ともあれ『朗詠集』は例としてはふさわしくない。

また、この「浮雲」は空に浮かぶ雲ではなく、馬の意である。

西京雜記曰、文帝自代還、有良馬九匹。皆天下駿也。一名浮雲、……一名絶塵。号为九逸(『初学記』

卷二十九・馬)

と、馬の名であつたものが、「明月承鞍上、浮雲落蓋中」(『李嶠百二十詠』・「馬」と馬そのものを指すようになる。それを平安朝でも受け入れ、

船尾西廻、棹残月而不繫、馬頭東去、策浮雲而

將行(『本朝文粹』卷九・248、慶滋保胤「暮春於文

章院、餞諸故人赴任、同賦別方山水深」序)

乘閨月之余飯、策浮雲而放遊(『本朝続文粹』卷

十、藤原実範「殿上花見」序。『朝野群載』卷一、「殿

上花見和歌」序)

或策浮雲、不執轡、或御遺風、不顧身(『雲州往

来』上)

と、馬の異名として用いる例が多い。右の「策」は「鞭」に同じであり、むち打つの意。問題の句は、ある者は馬に

乗って走り出し楽しんだと解するのがよい。

翌二十三日、左方一行は帰洛の途に就き淀川を溯る。そして「鳥飼の御牧を過ぐる間」(89)——「過」は、立ち寄る意の「よぎる」と読むべきである——、「左馬頭良経朝臣」によって、「便有^三其儲^二」つまり膳が設けられた。さらに「削氷^{けつひょう}」も供せられている。ここには氷室があるらしい。豪勢なもてなしである。「便有^三其儲^二」には、三書に相違がある。全書・和歌大系はこのままで、古典大系は「儲」に「也」がつづく。これは類聚歌合の十卷本・二十卷本のいずれに拠るかの違いである。「也」があるのは十卷本。なお和歌大系が「便^レ其^レ儲^レ有^レる」と読むのは誤り。終止形の「有り」がよい。

この後の「又献^二削氷^一。暑月銷汗誰求^三燕珠^一哉」(89)について述べておく。「暑月」は古典大系・和歌大系の本文で、全書は「暑日」に作る。陽明叢書によれば、どちらとも読みうる。この部分の典拠である『拾遺記』(巻四)には、「当^三隆暑^二之月^一、体自輕涼」とあるので、「暑月」がよいかもしれないが、断定はできない。三書の「燕珠」についての注を抜き出せば次のとおり。

古典大系―珠に似て非なる燕珠(燕石)のようななま

じつかな御馳走を誰が欲しがろうか。

全書―だれかこれを措いて燕珠のやうな珍しい料理を求めようか。燕珠(燕石)は珍らしいものの譬喩として使つたのであらう。

和歌大系―夏の汗消しに誰が酒を欲しがろうか。

燕珠―「宴酒」をしゃれた言葉か。

いずれも「燕珠」の理解に誤りがある。ここは五月二十三日に、「削氷」を口にしたのであるから、汗を消すのに「燕珠」など求めたりしないの意となる。「燕珠」は、御馳走でも、酒のことでもない。この珠は、黒蚌から千年に一度生まれると言われる珠。燕の昭王が常に持っていたところ、暑い盛りであつても涼が得られたという故事にもとづく。直接には、

班婕妤团雪之扇、代^三岸風^二以長忘、燕昭王招涼之珠。
当^三沙月^二以自得(『本朝文粹』巻八・223・大江匡衡
「夏夜守^三庚申^二、侍^三清凉殿^二、同賦^三避暑^二暑对^三水石^一。応^レ製^二序。『江吏部集』巻上。『和漢朗詠集』巻上・162・
納涼)

による。匡衡は、月の光が砂に当たったのを、「招涼之珠」が手に入ったと言い、納涼の風情を描き出した。漢文日記

の場合は、水そのもので涼を得ている。

日記によれば、このすぐ後、「大江御厨司等五六艘、籠_二鷗鷁_一而_レ浜_レ流、各獻_二水鮎一筐_一」(89)とある。「大江御厨司等」は、一行とともに「浜_レ流」淀川を溯行して、鵜飼を披露し、「水鮎」を供している。「鳥飼御牧」での「盃盤之備」「水陸之珍」とともに、かなり大がかりなものでなしの数々と言えよう。左方では、藤原頼通の男通房が方人であつたために、左方への労いとして頼通の配慮があつたのではないか。「大江御厨司」からの奉仕は、頼通すなわち摂関家との繋がりがあるゆえであらう。⁽⁴⁾

さかのぼって左方一行は、二十一日にまず石清水八幡宮に詣で(81)、翌日「山崎橋下」で船に乗って淀川を下り、「熊河岸」に着いて馬に乗り「住吉社」に向う(82)。馬の手配ができていたのである。周到に準備した参詣と言えよう。「熊河岸」については、全書・和歌大系には説明はなく、古典大系には「未詳」とあるのみ。しかし、この地名は諸書に見える。賀陽院水閣歌合の四年前、長元四年九月から十月にかけて、女院藤原彰子が石清水八幡宮・住吉社に参詣している。その時の詳しい記録が『栄花物語』(殿上の花見)にある。これによると、淀川を下って、

(九月)二十七日、津の国に着かせたまひて、やがて熊川に着かせたまふ。……

二十八日のつとめて、住吉に着かせたまふ。

とあり、「熊川」で下船して一泊し、翌日船で住吉社へ向かつたようである。もう一例挙げておく。この歌合から十三年後の永承三年十月の記録「宇治関白高野山御参詣記」に「熊川」の名が見える。まず旅の一日目十一日に淀川を下り、「長柄橋下」を過ぎて「入_レ夜着_二御熊川_一」した。翌日の「暁更」に「自_二熊川_一令_レ廻_二給_一」い、住吉社に向かつてゐる。そして高野山からの帰路、天王寺を参詣して陸路を通り「入_レ夜着_二御熊川御宿_一」した(十九日)。この場所は当時の淀川の河口近くと考えられている。⁽⁵⁾

「熊川」との関わりで、もう一つ地名を取り上げたい。住吉社での報賽を終えた左方一行は、二十三日の「辰時」に「大渡」で乗船して帰途に就いた(89)。この「大渡」について、全書と和歌大系には言及がなく、古典大系は「未詳」と注する。この地名も諸書に見える。頼通の父道長は、高野山参詣の帰途天王寺を参詣してから「国府大渡下」へ向かい、ここで船に乗り淀川を上っている(『扶桑略記』治安三(一〇二三)年十月二十八日)。また降って

永保元（一〇八一）年三月二十日、藤原師実が住吉社へ向かう。「淀津」で乗船して下り、「西終着御大渡。」す。そして「令^レ騎御馬」め、「住吉南浜飯屋」に到着している（『帥記』）。「熊川」と「大渡」は、同一の場所であろうといわれている。ともにそこで乗船しており、主要な港津であることは明らかであり、そこから先の水行・陸行の起点となっている。ただ一つの作品の中で、同一の地を異なる名で呼ぶのかという疑問はある。両者は近接している可能性はあるが、それでも地名を異にするのは解せない。いかがであらうか。

三

通常漢詩文は、過去のしかるべき典籍や著名な表現等を踏まえて制作するものである。その詩文に誰もが知る表現や語彙・故事などをちりばめるのは、周知のところ。この歌合の漢文日記でもそれは言える。そのいくつかを指摘し、主要な典拠について述べておきたい。

まず歌合当日（十六日）、左方の歌人らが現れる場面（74・75）を取り上げよう。賀陽院の寢殿の背後にある池

（「後池」）のほとりに「文殿」があり、ここから船で出発して、寢殿の東の流れ（「潺湲」）を経てやって来る。そして同乗している「伶人」らが樂を奏する。左方の登場はまことに華やかである。一方右方は、その宿所が、歌合の場である「水閣」の「南廊」にあり、左方のような演出などはない。この差は、左方の「方人」に頼通の「家督」通房がいるからであった。日記は左方がやって来る模様を、

糸竹錚鏑、池水湛然。遂不^レ知^二方外也^カ人間也^カ。亦不^レ知^二崑閬^ヲ蓬瀛^ヲ。縦観之者、目不^二暫捨^一矣（75）

と描いている。三注釈書に典拠等の指摘はない。まず管絃は「錚鏑」と奏で、その船が浮かぶ池の水は溢れんばかりであった。つづく対句は、目の前の光景があまりにすばらしく、「方外」（世俗の外）か「人間」（人の世・世間）か、また「崑閬」（西方にある神仙の山）か「蓬瀛」（蓬萊と瀛州。東方の海上にある神仙の山）かが分からず、戸惑うほどだという。仙界を髣髴させる景観である。ここのは、

指^二蓬壺^ヲ而翻^レ翰^{ツバサヲ}。望^二崑閬^ヲ而揚^レ音^{（『文選』）}。卷十四、南朝宋の鮑照「舞鶴賦」。呂向注「蓬壺崑閬皆仙山也」

遂不_レ知_二方_一外也。塵中也。又_レ不_レ知_二露_一萊_一乎。雲閣乎。『本朝文粹』卷十一・339、大江朝綱「重陽日侍_レ宴、同賦_三寒雁識_二秋天_一。心_レ製_一」序⁽⁸⁾。
不_レ弁_二怒_一梅敷。門柳敷。又_レ不_レ知_二野_一杏敷。園桃敷。』(同卷十・297、大江朝綱「晚春陪_二上州大王臨水閣_一、同賦_三香乱花難_レ識。心_レ教_一」序)

などにもとづいている。はじめの「舞鶴賦」は、仙禽となつた鶴が、神山を直指して飛び立つ様を描く。次の朝綱の詩序は、重陽の節会に連なつた時のえも言われぬ感嘆を表現している。記事はこの詩序の措辞をほぼそのまま利用している。その「塵中」は「人間」に置き換えたのである。第三例は同じ語法で、朝綱の作でもあり、参看の一つと言えよう。なお、「崑閬」と「蓬瀛」の対をなす例に、「想_二蓬瀛_一兮靡_レ觀、望_二崑閬_一兮難_レ期」(『初学記』卷五・総載山、初唐太宗「小山賦」)がある。

賀陽院で繰り広げられる光景を目の当たりにしては、「縦觀之者」好きなように見ていた人々たちも、この世のものとも思えぬ光景から、「目不_二暫捨_一矣」視線を外せなかつた、じつと見入つたのであつた。この表現は經典等に例が多い。

曲_レ躬恭敬、合掌向_レ佛。瞻_二仰尊顏_一、目不_二暫捨_一。佛

神力故、各於_二掌中_一、微妙香花、自然盈滿(『大般若波羅蜜多經』卷四五七・第二分堅非堅品第六十四之二)皆悉悚慄、一心合掌、瞻_二仰世尊_一、目不_二暫捨_一。(『法華經』授記品)
感_レ之逼_レ身、目不_二暫捨_一。(『本朝文粹』卷十・293、大江朝綱「紅桜花下作。心_二太上法皇製_一」序)
仏の姿を見て少しも目が離せなかつたという感嘆を表している。最後の例はこれを応用し、桜花賞翫の場における、酒宴や奏楽に目を奪われるさまを描いている。
この後の文章は、特定の典拠を指摘できるのではないが、本文に問題がありそうなので取り上げておきたい。まず対句によつて建物内の様子を描き出す(75)。

〔或衣色照曜於簾中、
或香氣酷烈於檻外。〕

室内のあでやかな衣装の輝きと外にまで放たれる強い香氣。女房がいたのであろう。「酷烈」は過度の表現ではあるが、五月半ばの蒸し暑さと相まってむせ返るような香が漂つたと取るべきであらう。これを評して、

斯乃優悠好_二耳目_一之娛也(75)

コレスナハチ、優悠耳目ヲ好クスル娛ナリ(全書)

斯れ乃ち優悠耳目を好ばしむる娛しみなり（古典大系・和歌大系）

と、觀衆の耳目を樂しませたという。ただ、「優悠」の落ち着きがよくない。それに用例が見つけれない。ここを古典大系は「そうしたものが又、とりも直さず耳目を喜ばしめる優美高雅な娛しみとなつてゐる事を指す」、和歌大系は「これはのどやかに耳目を喜ばせる樂しみである」と解する。このような理解になるのかとは思ふが、本文に何らかの欠陥がありはしまいか。「斯乃」と前文を承けており、「衣色」の輝きと強烈な「香氣」は、……であると言う。この前後に對をなす箇所が多い点を考慮すると、欠字を想定して、

斯乃（優悠之好、耳目之娛也）

のような一文が考えられるであらうか。ただこれが本来の姿であつたとしても、やはり的確な解釈はむづかしい。表現の用例をさがさねばならない。對をなす後句は、紀淑望「古今和歌序」（『本朝文粹』卷十一・342）の「但見上古之歌、多存古質之語、未_レ為_二耳目之翫_一、徒為_二教戒之端_一」や同類の語句にもとづくであらう。そうなると前句が問題

となるが、やはり「優悠」は難物である。後考に俟つ。

そして、左方の人々が到着して下船したところで、庭園の景觀を次のように表現している（75）。

異草雜樹、奇巖怪石、千名万形、不_レ可_二觀縷而記_一之。珍奇な草や木、奇怪は岩石は、様々な名前を持ち變化に富んだ形状であり、詳しく書き記すことはできない、とある。異郷を思わせる植物や地形を描き出すに当たっては、先行する作品の表現を利用している。

此外奇巖怪石之千象万形、靈樹異草之大隱無名。（『本朝文粹』卷十・316、慶滋保胤「冬日於極樂寺禪房」

同賦落葉声如雨」序）

が出典であるのはまちがいない。⁽¹⁾「異草雜樹、奇巖怪石」の対句は、保胤の詩序をほぼそのまま引いている。出典の「千象万形」は「大隱無名」と對をなすが、日記の「千名万形」には對をなす句がなく、「不_レ可_二觀縷而記_一之」とつく。この句にも出典がある。これについては後述する。

関連して次の表現も、保胤のこの詩序を利用している。漢文日記の「雖講經畢、僧侶未_レ退。蓋為_レ見象外之佳遊也」（74）つまり法華三十講が終わっても僧たちが帰らないのは、「象外」世俗とは異なるこの邸内における、「佳

「遊」を見るためであらうと記す。保胤の詩序には、「蓋象外之境、壺中之天也」とあり、極楽寺を俗外の地と見なしている。漢文日記はこれを参考にしたと考えてよい。俗界とは異なる空間を描く上でこの詩序は有効であった。

じつは保胤詩序の「此外奇巖怪石」以下には典拠がある。

堂北五歩、^二拋^三層崖・積石、嵌空・垤[△]塊[△]、[△]雜木異草、[△]蓋[△]覆其上[△]。……陰晴踴晦、昏旦含吐、千變万狀、[△]不可[△]殫紀、[△]覲[△]縷[△]而言[△]。（『白氏文集』卷二十六・1472、

「草堂記」）

これは、中唐の詩人白居易が、江州の司馬時代に建てた草堂と、その周辺の景観を描いた文章である。その地は、名峰廬山の山北に当たり、香爐峯と遺愛寺との間に位置する、廬山の中でも随一の絶景であった。「堂北五歩」以下は、草堂近くのさまざまな地形・滝や泉などの水流・草木の姿を描き、加えて四季折々の風情を紹介する。そして引用箇所のように、時とともに変化する眺めはどうてい語り尽くせないと言う。この表現を保胤が取り入れて詩序を書き、それを資業が利用したという経緯を推測できよう。「覲縷」は、くわしく、こまかく、つぶさに述べるの意。

斯実神妙之響象、[△]嗟[△]難[△]得而[△]覲[△]縷[△]。（『文選』卷五、晉

「賀陽院水閣歌合」 覚書

の左思「吳都賦」）

詩髓腦有^二每^レ句之文^一則[△]覲[△]縷[△]也（『本朝文粹』卷七・177、紀齊名「弁^二申文章博士大江朝臣匡衡愁申学生同

時棟省試所^レ獻詩病累瑕瑾^一状」）

など、例は多い。「不^レ可[△]覲[△]縷[△]而記^二之^一」は表現の類似からして、「草堂記」の一節を活かしたと見てよい。

歌合に勝利した左方の歌人らは、二十一日から二十四日にかけて、報酬のために石清水八幡宮と住吉社に参詣している。二十二日、一行は住吉社「礼殿」で「奉幣」し、ついで「杜司」に「禄」をたまう。すると「杜司」は、「避^レ座再拜」したとある（82）。この「避^レ座」は座っている敷物を起つて退く行為であり、敬意を示すへりくだった所作である。三書ともここに説明を加えていない。この語は、『孝経』（開宗明義章）の「曾子避^レ席。曰、参不^レ敏、何足^二以知^レ之^一」にもとづく語。曾参が師に対して自分の愚かさを認め、教えを請うために謙虚な姿勢を示しているところである。この語は、

相如於^レ是避^レ席而起、逡巡而揖曰（『文選』卷十三、南朝宋の謝惠連「雪賦」）

ともある。平安時代においても、「臣等謹奉^二勅旨^一、避^レ席

議曰、……（『菅家文章』卷七・516、「未旦求衣賦」と、勅旨を承った際の所作にもみえ、「避座」と同じ意である。「太閤執盃、進居上頭。摂政避座、向居右大臣。」（『小右記』寛仁二年十月十六日）は、「太閤」藤原道長の娘威子が立后した時に催した祝宴の一齣で、上席に來た道長に、「摂政」頼通が座を譲るところである。敬意を込めていないとは言えないが、席を父に譲ったと解してよい。当時の古記録では、ほとんどがこの用法である。なおこの後道長は有名な「この世をば……」の歌を詠む。日記の「避座」は、「社司」の威儀を正した振る舞いである。場の雰囲気を実している。注意しておきたい。

この後、「十列」^{とをつ}「音楽」や歌会が、「達旦不寝」夜明けまでつづいた（82）。日記は歌会の真名序（資業作）と和歌を書き記している。序の表現の典故を指摘しておく。

爰蓬壺侍臣数輩、風雲随手、煙霞在心之者（86）

は、歌合の参加者について述べている。その人たちは宮廷の侍臣であり、和歌（「風雲」）を思うがまま生み出すことができ、風趣（「煙霞」）を心を持つ者たちだという。この後半の対句を構成する「随手——在心」は、紀齊名「仲秋陪中書大王書閣、同賦望月遠情多。応教」序（『本朝

文粹』卷八・205）の「大王賢智在心、文彩随手」を用いたのであろう。語の一致のみならず、それぞれに「煙霞」と「文彩」があり、ともに風流韻事に関わる内容を盛り込んでいる。

そして、勝利した「我党」（左方）の文藻を讃え、

詞華擅艷、宛類春花之綻林、思露添光、奈何秋月之出嶺（86）

と評する。この隔句対の前半、和歌の美しさは春の花がほころぶかのようなものであるとする表現は、これといった典故を見いだしていないが、紀淑望「古今和歌序」（『本朝文粹』卷十一・342）が「臣等詞少春花之艷、名窃秋夜之長」と、詞の美しさが少ないと謙遜する対句を利用したのであろうか。後半は、

秋夜待月、纔望出山之清光。（『菅家文章』卷五・

365、「早春觀賜宴宮人、同賦催粧。応製」序、
『本朝文粹』卷九・244）

に拠ると見てよい。これは宴席に現れる宮人らの美しさを称賛している。隔句対の後半は、我々の詩想は輝いており、山から昇る澄んだ月光を仰ぐかのような意となる。「奈何」は、どうしようか、どうしようもないの意となること

が多いが、ここは、源順「三月尽日、遊^三五覺院、同賦^三紫藤花落鳥闌閑」序（『本朝文粹』卷十一・322）の「春醉和^レ顔、末利夫人之色不^レ異、清吟驚^レ耳、善唄比丘之聲奈何。」と同じく、似ている、違いはないと解してよいだろう。なお和歌大系は、この部分を「思露光を添ふること秋月の嶺を出づるに奈^{いづれ}何ぞや」と読むが、「いづれぞや」では、どちらなのか、どちらがすぐれているのかの意となり、文意には合わない。「……出づると奈^{いかに}何」（……と比べてどうなのか、引けはとらない、同等のものだ）でよいのではないか——対をなす前半に「宛類」（似る、ちょうど）のよう^{うだの意}）とあるのは参考になる——。

この歌合の漢文日記は、『和漢朗詠集』『本朝文粹』^②を利用した箇所が多い。当時の詩人・歌人としては当然のことである。作者藤原資業としては、周知の表現を用いながら、どれだけ新しさを盛り込み、確かな記事とするかに腐心したのであろう。また、歌合の舞台である賀陽院を、外界とは異なる特別な空間であると強調しつつ、歌合をめぐる一連の出来事が、いかに華やかに繰り広げられたかを描こうとしたのである。

この漢文日記は、歌合の最中における主催者頼通の動静

にはほとんど触れない^③。しかし、賀陽院の建物・庭園そのものが權威の象徴であり、歌合当日のさまざまな催しに、その風流韻事を領導する頼通の姿を見て取ることができないのではない。また左方一行が報賽のために、石清水・住吉社に参詣して、奉幣・賜禄・十列や音楽の奉納などをしてい^る。帰途には、「鳥飼御牧」で贅沢な膳を供せられ、淀川を上る際には「大江御厨司等」の船が同行し、「水鮎」を献つた。これら豪華な参詣やもてなしは、五位程度である左方の歌人たちには、通常では与えられないのではない。過分な待遇や報酬は、すべて頼通の計らいあるいは後援があればこそであろう。日記の記者藤原資業は、その意向・威厳をあらわには描かない。書かずとも誰もが察したはずである。漢文日記の末尾には、「於^ア戲、当時勝趣、後代難^レ伝。今依^三教旨、懋^レ記盛事^三而已」と、頼通の命によって書き記したとことわっている。執筆の姿勢について、指示を受けていたのではあるまいか。

四

賀陽院水閣歌合のうちから、任意に問題となる箇所を取

得たい。

り上げて、おもに漢詩文との関わりについて卑見を述べた。漢詩文受容の問題に引きつけすぎているとの批判があらうし、漢詩文を持ち出さずとも解釈は可能であるとの意見もあるにちがいない。それを承知で言えば、やはり和歌やその記録が漢詩文の表現や発想を取り入れ、故事を詠み込んでいることは知るべきだと思う。当時の歌人たちの多くは、和歌とともに漢詩文にも造詣が深かったはずである。漢文日記の作者藤原資業が書いた文章を読む人々は、その背後にある漢詩文に想到して、表現のふくらみ・奥行きを知ったであらう。また、何を描こうとしたかを理解したはずである。この点を肝に銘じておきたい。

もとよりこの歌合を検討する上で、漢詩文のみを重んじるのではなく、和歌の周辺諸学を視野に入れておく必要がある。本稿は一分野からの試みである。何らかの参考になればと思い、寸見を並べた次第。この歌合を十全に理解するためには、漢文日記の部分も読解しなければならぬ。その上で歌合全体を読み直すことを希望する。

人文科学とりわけ文学研究の基礎基盤は、訓詁注釈であらう。本稿はそのささやかな実践例でもある。なお用例の見落としや誤読・誤解があるかと恐れる。大方のご批評を

注

- (1) 賀陽院（高陽院）については、太田静六「宇治関白藤原頼通の邸宅・高陽院の考察」（『寝殿造の研究』一九八七年二月・吉川弘文館、所収）、隴谷寿「藤原頼通の高陽院」（『平安貴族と邸第』二〇〇〇年十一月・吉川弘文館、所収）参照。

- (2) 藤原資業については、川村晃生「藤原資業―付、藤原資業和歌拾遺」（『撰関期和歌史の研究』一九九一年四月・三弥井書店、所収）参照。

- (3) 『拾遺記』（卷四・燕昭王）の該当本文は次のとおり。

有_二黑蚌_一、飛翔来_二去_一於五岳之上_一。昔黄帝時、霧成子遊_二寒山之嶺_一、得_二黑蚌_一在高屋之上_一。故知黑蚌能飛矣。至_二燕昭王時_一、有_レ国献_二於昭王_一。王取_二瑤漳之水_一、洗_二其沙泥_一。乃嗟歎曰、自_レ懸日月以来、見_二黑蚌生_レ珠_一、已八九十。遇_二此蚌千歲一生_レ珠也_一。珠漸輕細。昭王常懷_二此珠_一。当_二隆暑之月_一、体自輕涼。号曰_二銷暑招涼之珠_一也。

- (4) 永承三（一〇四八）年十月に、藤原頼通が高野山に参詣した時の記録「宇治関白高野山御参詣記」（平範国作）には、桂鶉飼廿艘、宇治鶉飼十四艘、依_レ召候_二御共_一。始_レ自_二

御船、^{アマネク}普支配船々令レ勤役送（十月十一日）

過御長柄橋下^二之比、漸及^二昏黒。鵜飼等各燃^二篝火、

普照^二行路（同日）

鵜飼等迎參、各懸^二篝火、互候^二御船之先後（同十九日）

とあり、宇治と桂の鵜飼らは、頼通一行が淀川を下り上る時に召され、付き添い奉仕している。このように摂関家に仕えることによって、種々の権益や庇護が与えられたはずである。「大江御厨司」も同様の関係を結んでいたであろう。頼通の高野山参詣においても、十二日に一宿した「熊川」から船で住吉社へ向かう折りに、

暁更自^二熊川^一令^レ廻給。大江御厨司忠光、引^二率下司等、每^レ手秉^レ燭、近候^二御船辺、為^二路指南^一。

と、「大江御厨司」らが灯りを手にして——船上でのことであろう——、「御船」の行く先を照らしたと記している。これらを参看すれば、頼通の指示によって、「大江御厨司等」が、左方一行が淀川を溯行する際に付き従ったと考えてよからう。このような例から推測すると、左方への厚遇やその派手な演出には、頼通の配慮が背後にあると見られる。

(5) 大村拱生「平安時代の摂津国衛・住吉社・渡辺党」（榮原永遠男・二本宏編『難波宮から大阪へ』二〇〇六年三月・和泉書院、所収）、西本昌弘「平安時代の難波津と難波宮」

「賀陽院水閣歌合」覚書

（続日本紀研究会編『続日本紀と古代社会』二〇一四年十二月・塙書房、所収）参照。

(6) 注(5)の大村氏論考参照。

(7) 「錚鏐」の「錚」は「楚耕反、金声」（篆隸万象名義）第五、「鏐」は「樅 楚江反、撞也、鏐字」（同・第二）とあるので、「錚鏐」は、金属の当たる音を表す。金属音に似た高い音を奏でたようである。

時随^二冠蓋^一認^レ祠看、新楽^二錚鏐^一古^二寒（『本朝麗藻』卷下・84、藤原為時「九月尽日、侍^二北野社、各分^二一字^一詩」）は、その一例。

(8) 「露菜」「雲閨」について、柿村重松『本朝文粹註釈』は、「露菜謂^二蓬萊^一也。露則飾辞也」「雲閨謂^二崑閨^一也。雲亦飾辞耳」と注している。ともに例を見ない語である。

(9) このあたりの描写は、永承五（一〇五〇）年六月五日の祐子内親王歌合の記事である、

衣色照^二耀於簾前^一、香氣発^二越於戸外^一。乃縦視之好、不^二俗眼所^一窺。

と似ている。これは全書の指摘。すでに『平安朝歌合大成三』957ページにも同様の指摘がある。この歌合の記事も藤原資業が書いているので、同じ表現が見えるのは当然かもしれない。両者の表現の類似は次のとおり。

賀陽院歌合

祐子内親王歌合

○蓋為_レ見_二象外之佳遊_一也

(74)

○事出_二意外_一、嘉歎不_レ足

(74)

○縱觀之者、目不_二暫捨_一

矣。或衣色照_二曜於簾中_一、或香氣醕_二烈於檻外_一(75)

○異草雄樹奇巖怪石、千名

万形不_レ可_二觀縷而記_一之

(75)

○其後内大臣退出、即有_二

曳出物_二龍蹄一疋_一(81)

○此間曳_二出華厩馬各一疋_一。

余興不_レ尽之故也(81)

……即令_レ題_二和歌、諷吟

之間、達_レ旦不_レ寢(83)

○或对_二残月_一以述_レ懷、或

鞭_二浮雲_一以乘_レ興(88)

○今依_二教旨_一、懋記_二盛事_一而巳(89)

象外之勝遊、未_二曾有_一者歟。

嘉歎之余、右大臣執而懷之

衣色照_二曜於簾前_一、香氣發_二

越於戶外_一。乃縱視之好、不_二俗眼所_レ窺。

風流之美、不_レ可_二觀縷_一。

退出之比、曳_二出龍蹄二疋_一。

自余上卿、達_レ旦退出。興

味不_レ尽之故也。

浮雲半漢、視者驚_レ眼。

式部大輔資業、奉_二教旨_一、粗記之而已。

また散会時の記事である、「自余上卿、達旦退出、興味不_レ尽之故也」(夜明け頃に帰るのは興味が尽きないからだ)は、賀陽院歌合の「雖_二講經畢_一、僧侶未_レ退。蓋為_レ見_二象外之佳遊_一也」(まだ帰らないのは俗外の遊びを見たいからだ)と同工の言い回しである。

(10) 「耳目之娛」は、『文選』序の「譬_二陶匏異器_一、並為_二入_レ耳之娛_一、黼黻不_レ同、俱為_二中悅_レ目之玩_一」にもとづく語。

(11) 「異草雄樹奇巖怪石」については、倉田実氏が、記事の文飾に関して、保胤の詩序が参考になると述べておられる(藤原頼通創建「高陽院」の池庭、『庭園の思想と平安文学 寝殿造から』二〇一八年十一月・花鳥社、所収)。なお、この直前の記事「糸竹錚鏦、池水湛然」について、同詩序の「水是屈曲、色即瑠璃」との対応を指摘しておられるが、前者は前庭の池が水を湛えるさまを言い、後者は庭内を折れ曲がる水流のことであり、描く対象が異なる。

(12) 長元八(一〇三五)年の時点では、『本朝文粹』は成立していない可能性もある。その成立については、後藤昭雄「本朝文粹」解題」(『本朝漢詩文資料論』二〇一二年一月・勉誠出版、所収)参照。もとよりこの書は名文を集成しているものであるから、その多くは早くから流布していたはずである。

(13) 四番「菖蒲」で、左が「瞿麦」の歌を、右が「菖蒲」の

歌を献り、判のあった後、右から左の誤りに決着をつけるべきだと意見が出た。これに対して、「殿下」頼通が、勝負がついてからでは議論はできないとして、この場を収めた。頼通が描かれたのはこの時のみである。

（神戸女子大学教授）

《キーワード》

賀陽院水閣歌合 漢文日記 藤原資業 注釈